

佐賀県文化財調査報告書第26集

佐賀県鳥栖市

本川原遺跡



佐賀県教育委員会
建設省佐賀国道工事事務所

佐賀県教育庁文化課

まえがき

九州高速自動車道の整備にともない、鳥栖市の交通上にしめる重要性が一層たかまることが予想され、増加する自動車の交通緩和のため、鳥栖インターチェンジと国道34号線の分岐点の間を拡幅せざるを得なくなりましたので、その区間の埋蔵文化財の調査を佐賀県教育委員会に依頼したのであります。

調査の結果、佐賀県では現在まで発見例がほとんどなかった方形周溝墓の存在が明らかとなり、その構造が明らかにされたことは実に意義深いことであったと存じます。その意味でこの小冊子が研究資料として活用されれば幸甚であります。

この調査結果についての報告書を刊行するに当りまして、発掘調査にご協力いただいた佐賀県教育委員会をはじめ関係各位、ならびに早急に記録をまとめていただいた執筆者諸氏に対して厚くお礼申し上げます。

昭和49年3月25日

佐賀国道工事事務所

所長 井 信義

佐賀県教育庁文化課

も く じ

まえがき

I	はじめに	1
1.	調査の経過	1
2.	調査員の組織	1
II	本川原遺跡の環境	1
1.	地理的環境	1
2.	歴史的環境	2
III	本川原遺跡の調査	5
1.	遺跡の概要	5
2.	第1号方形周溝墓	5
(1)	外部構造	5
	ア. 封土	
	イ. 周溝	
(2)	内部構造	13
(3)	出土遺物	13
3.	第2号方形周溝墓	16
	ア. 封土	
	イ. 周溝	
(2)	内部構造	17
(3)	出土遺物	17
4.	住居址	18
5.	その他の調査	22
IV	考 察	24
1.	土師式土器	24
2.	方形周溝墓墳丘構築論	24
3.	本川原遺跡の歴史的位 置	27
付.	方形周溝周辺の穴について	28

挿 図 目 録

1. 本川原遺跡の周辺図	3
2. 本川原遺跡地形測量図	4
3. 第1号方形周溝墓実測図(1)	7
4. 第1号方形周溝墓実測図(2)	9
5. 第1号方形周溝墓実測図(3)	11
6. 第1号方形周溝墓北溝断面図	13
7. 第1号方形周溝墓内部主体実測図	14
8. 第1号方形周溝墓出土遺物実測図	15
9. 第2号方形周溝墓実測図(1)	16
10. 第2号方形周溝墓実測図(2)	17
11. 第3号住居址実測図	19
12. 第4号住居址実測図	20
13. 第5号住居址実測図	21
14. 住居址出土の土器実測図	22
15. 土壇実測図	23
16. 第1号方形周溝墓封土断面図	25

I はじめに

1. 発掘調査の経過

九州縦断・横断自動車高速道の鳥栖インターチェンジ設置にともない、国道3号線の拡幅についての計画が佐賀国道工事事務所で進められていた。

この計画地の丘陵部分は、古来から「タブー」の地とされているというところから、佐賀国道工事事務所は佐賀県教育委員会に対して調査を依頼した。

そこで、昭和48年7月18・19日の両日にわたって予備調査が県教委によって実施された。その結果、方形周溝をもつ遺構の存在が確認されたのである。

その結果、佐賀国道工事事務所を事務局として緊急発掘調査を実施することになったのである。

2. 発掘調査員の組織

調査総括 木下 之治 県教委文化財調査監
調査主任 柳川 俊二 県教委文化課文化財係長
調査責任者 木下 巧 県教委文化課文化財係
調査員 石隈喜佐雄 文化課文化財係
松隈 嵩 県遺跡調査員
調査補助 天本 洋一、藤井 要、七田 忠明
協力 鳥栖市教育委員会、九州技研（株）、多久土木（株）

II 本川原遺跡の環境

1. 地理的環境

発掘調査を実施した本川原遺跡は、佐賀県鳥栖市永吉町字本川原に所在する。九千部山（標高 847m）を主峰として、東南および南に向って走る三支嶺があって、このうちの 하나가、権現山（626m）から南下して杓子が峰（312m）となり、さらに柚比町・今町の高位段丘となっている。つづいて東南に延びる数条の中位段丘¹の一つの末端丘上にこの遺跡は位置²していて、筑後川に注ぐ何本かの河川によって形成される広大な沖積平野が展開する様を一眺することができる位置に所在している。

注1. 小林肇「地形と地質」鳥栖市史

注2. この遺跡の表土層の下部はローム層に覆われている。

2. 歴史的環境

本川原遺跡の周辺には先縄文・縄文時代の遺物散布地が点在している。これらのほとんどが九千部山・杓子が峰から派生する段丘上、あるいは段丘末端に位置しているが、遺跡の内容については不明であり今後の調査にまたなければならない。

弥生時代の遺跡には甕棺墓群と住居跡がある。この遺跡の西北方約 500m の同一段丘上には田代天満宮東方遺跡²があって、95以上を数える甕棺墓群が存在し、その西方には石蓋単甕棺を埋蔵する太田観音東方甕棺遺跡³がある。この北西約 700m には、銅矛1口と鉄剣2口が発見された柚比東方弥生遺跡⁴があり、この遺跡のすぐ西方には田代公園⁵があって、丘陵頂付近から甕棺墓8組が発見⁵されているが、未だ相当数の甕棺が埋置されていると推察される。また、柚比町梅坂⁶の丘陵南斜面に甕棺遺跡が存在している。

鳥栖市の北方基山町の低段丘にも弥生遺跡⁷が群在し、中でも久保田遺跡⁸からは鉄剣1口が甕棺内から検出されている。

また、住居跡は鳥栖市今泉町の藤ノ木竪穴住居跡、および柚比東方弥生遺跡周辺から石斧・石庖丁や石鏃などが発見されている⁹。

鳥栖市を中心とする一帯は、弥生時代における農耕村落を基盤とする一つの社会を成立させており、河川の比較的上流に当る柚比地方がその中心的存在となっていたのではないかと考えられる。

この鳥栖地方の弥生時代の農耕社会は、古墳時代を迎えると、いち早く古墳文化を摂取し、古墳文化を開花させた。岡寺前方後円墳、庚申堂塚、剣塚などの前方後円墳¹⁰、装飾古墳として知られている史跡田代太田古墳をはじめ、上野古墳¹¹・薄尾古墳群¹²・杓子が峰古墳群¹³・神辺古墳群¹⁴そして東十郎古墳群¹⁵などが分布している、筑紫火君の根拠地がこの地方にあったことを物語っており、その中心は田代太田古墳から本川原遺跡を結ぶ地域と推定される。要するに、この地は弥生時代から古墳時代にかけての鳥栖地方の社会の推移を物語る遺跡が分布しているのであって、本川原遺跡はこの注目すべき重要な地域に所在しているといえることができる。

注1 木下之治「原始時代」鳥栖市史

注2 木下之治・木下巧「田代天満宮東方遺跡」佐賀県文化財調査報告書24

注3 佐賀県の遺跡「太田観音東方甕棺遺跡」佐賀県教育委員会

注4 松尾禎作「佐賀県考古大観」祐徳博物館

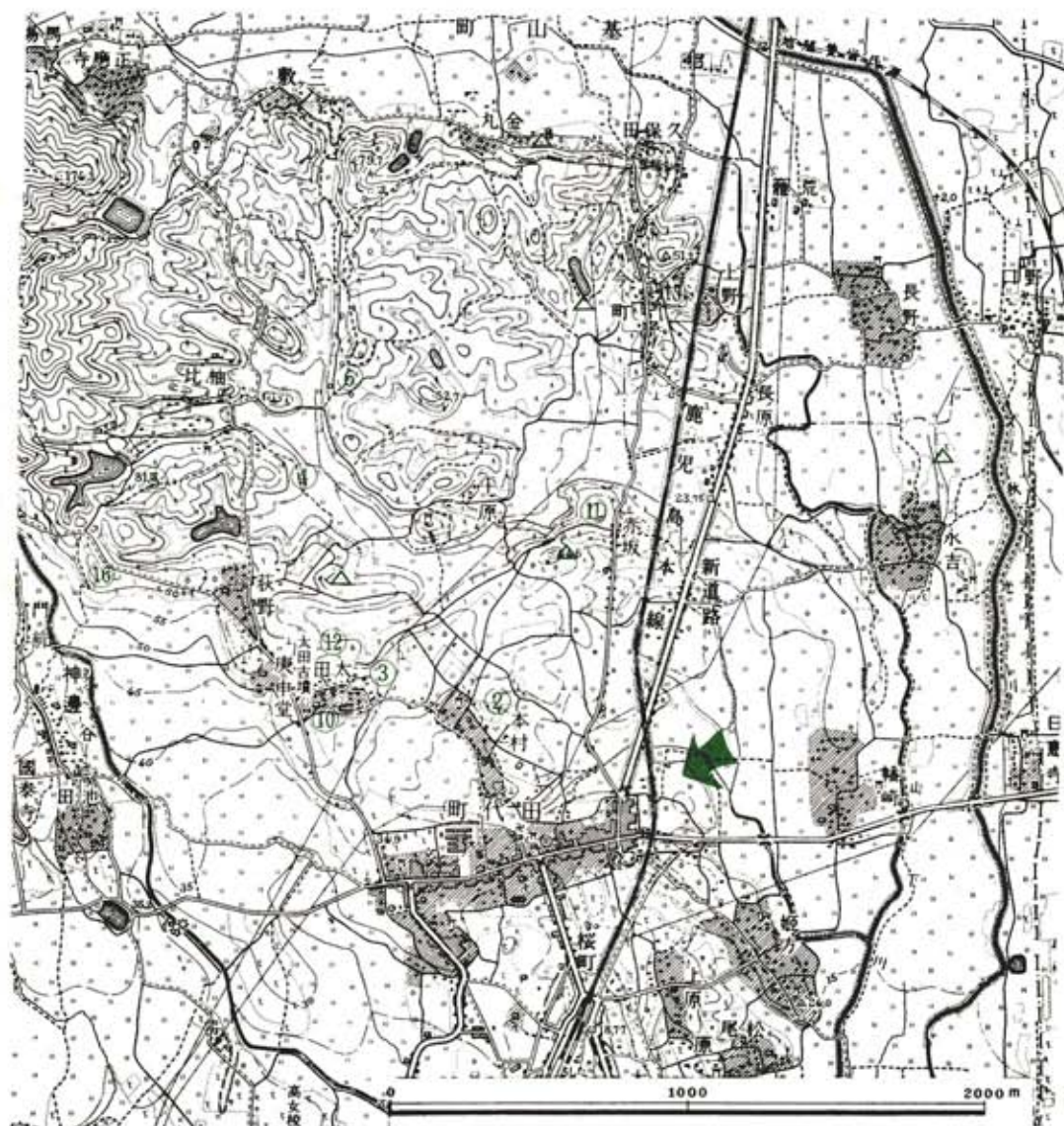
注5 昭和47年12月鳥栖市教育委員会が応急調査を実施したもの

注6 佐賀県の遺跡「うつろ坂甕棺遺跡」佐賀県教育委員会

注7 金丸遺跡・三ヶ敷遺跡・片山遺跡・会田遺跡・玉虫遺跡などがある。

注8 柴元静雄「久保田遺跡出土の鉄剣について」新郷土第 267号

- 注9 木下之治「原始時代」鳥栖市史
 注10 佐賀県の遺跡
 注11 松尾禎作「原始時代の鳥栖市」鳥栖史談2
 注12 佐賀県下の文化財
 注13 鏡山猛「基山町上野古墳」佐賀県文化財調査報告書3
 注14 松尾禎作「薄尾古墳群について」鳥栖史談2
 注15 佐賀県の遺跡
 注16 昭和45年3月調査。弥生時代から中世に及ぶ箱式石棺・土 墓群である。
 注17 木下之治「東十郎古墳群」佐賀県文化財調査報告書



1. 本川原遺跡の周辺図 (番号は注番号と同じ)

2. 本川原遺跡地形測量図



Ⅲ 本川原遺跡の調査

1. 遺跡の概要

本川原遺跡が存在する低段丘末端部は、標高26mのゆるやかな傾斜で宅地・圃場へと連続している(図1)。圃場面からの遺跡の比高は約10mである。この段丘末端部に形成する一つの頂点部に陸橋を東に向けた第1周溝墓が形成され、その東南隅に接して第2周溝墓が形成されている(図2)。

この遺跡からは、方形周溝墓の他に5戸の住居址が発見されたが方形周溝墓と住居址との複合関係からみて、方形周溝墓が形成される以前に住居が営まれたものではないかと考えられる。

この段丘の北と南側に2段に形成された段築があるが、これが方形周溝墓に伴うものか或いは住居跡に付随するものが明らかでない。トレンチによる調査の結果ではこの遺構の性格を明らかにする遺構・遺物を発見することはできなかった。地主及び古老の談によれば、終戦当時芋畑に開墾した時のものであろうということであるが、調査の結果からみると、この段丘上に遺跡が形成される中でこの段丘も派生的に築成されたものと推察される。

2. 第1号方形周溝墓

(1) 外部構造

(ア) 封土

第1号方形周溝墓は、この低段丘先端のほぼ中央部頂部に位置する。調査前の封土の実測図を25cmコンターで計測したものが図3である。この等高線によって平面的に観察すると、屈曲は認められるが標高26mまでは周溝に沿ったほぼ方形を呈する封土と推察することができるであろう。しかし、25.75mの等高線は余りにも乱れ、周溝東部の陸橋部ではその乱れがいちじるしい。このことは、この墳墓の構築以来の長年月にわたる自然的破壊と、開拓による人工的破壊に起因しよう。しかし、このような破壊を経てきてはいるが、截頭四角錐状の封土の基形と推定されるその残存を僅かながらも認めることができるのである。

封土のセクションによって、封土の断面を調べると次のとおりである。(図16)

ローム層の方形台状部の南周溝内側から北周溝内側までが13.4mで、その中央部約9mがほぼ平面に流れ両端約2.2mが30cmの比高で傾斜として溝に連続している。このローム層の上に厚さ約10cmの黒色土が両端の周溝まで覆っている。この黒色土の上に厚さ30cmの黒色土層が中央部約9mの範囲にわたって敷かれている。この第

2 黒色土層の上面に厚さ20cmの黄褐色土層の上面が表土層（耕作土層）の下面であって約10cmの厚さで封土全体を覆っており、封土最高部は標高26.16 mを測る。この状況は、東西の断面においても基本的に同様の断面を示している。

(イ) 周溝外側は、南北19.5m、東西20.5mの規模をもつ方形周溝であって、東溝は周溝外側は、南北19.5m、東西20.5mの規模をもつ周溝であって、東溝はそのほぼ中央部に溝が構築されない所謂陸橋部を形成しているが、陸橋部の長さは約6mである。（図5）

周溝の上面における最大幅 2.5m、最小 1.5m で、溝底は約60cm余りの幅でゆるやかな丸底を呈している。溝の断面は、方形台状部で、内側が約38°の勾配をもち、外側においては上部から底部に向い約40cmの深さまでは台状部側とほぼ同様の傾斜をもつが、それから急に約65°の勾配で掘り込まれて底面に達する。

四隅のカーブの構成や各辺にける溝の構造には多少の差異が認められる。すなわち、溝は西溝と陸橋を境にした南と北溝の3つの部分に分けることができるようである。

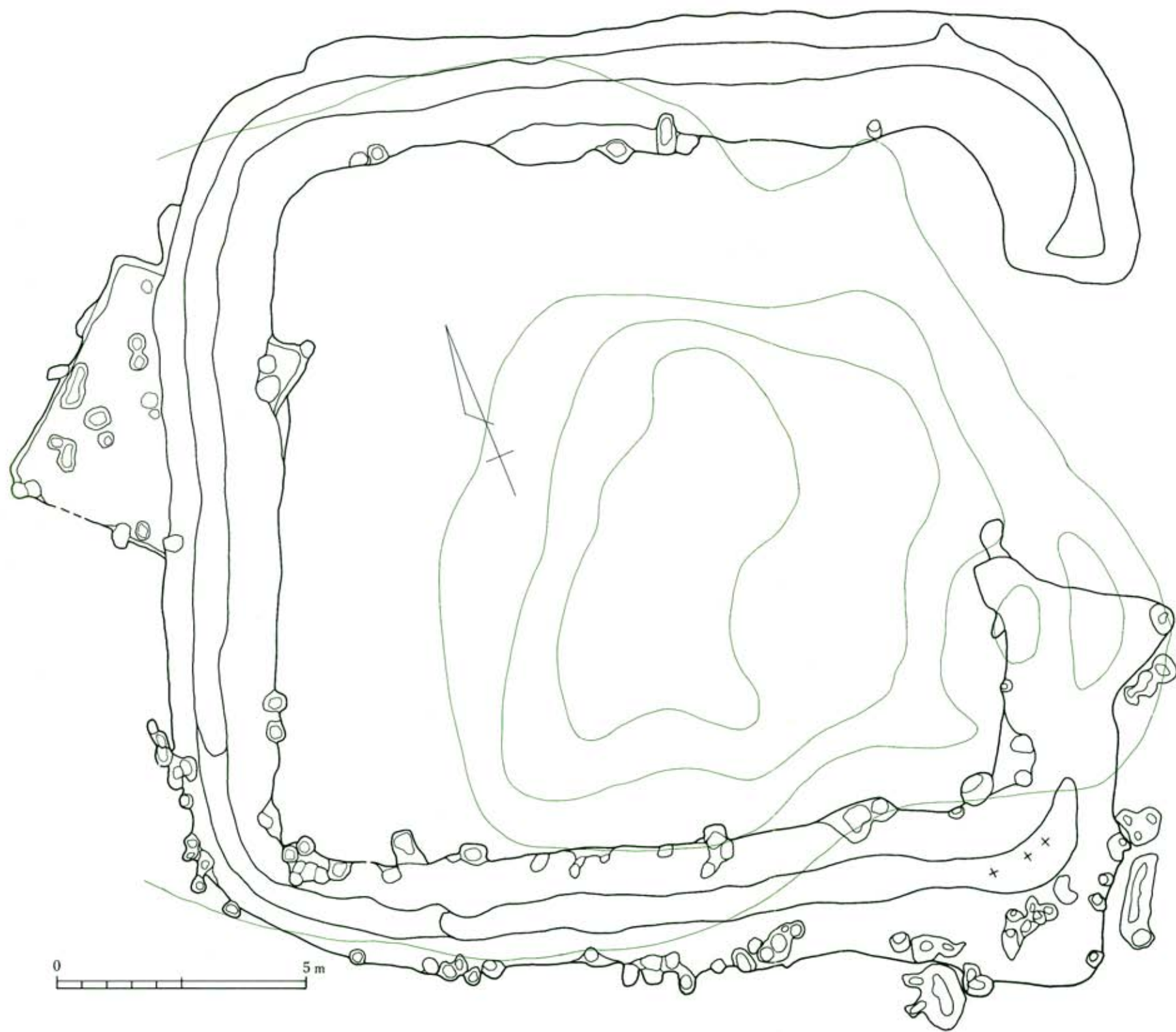
西溝部は、中央部約10mの間は幅・深さとも同様の形態を呈するが、カーブにさしかかると徐々に底面が浅くなるとともに、上面幅も狭くなり曲部では、中央部との深さ比が約30cmとなり、幅も 1.2m となる。

また、陸橋を境にした南と北溝はともに東部でカーブを呈して、西溝と同様な形態をとるが、曲部には西溝に見られるような上面幅の狭少や深さ比が認められないで、東溝に連続していることが注目される。このことはカーブしていても東溝と南・北の溝は同一の溝として掘削したことが考えられる。

周溝内における土層を観察すると、（図6）周溝内の土層は2群に分類することができる。つまり、黒褐色土層と黒色土系土層である。黒褐色土層は周溝の底部から約25cmを測り、図7のように溝壁に沿ってゆるやかなカーブを描きながら壁面上部に至っている。この黒褐色土層の底部堆積の状況は周溝全体に及ぶ傾向を示している。

黒色土系土層は、その細別が難しく必らずしも明確にはなし得ない。この黒色土系土層は、黒褐色土層の上に約60cmの厚さで堆積して表土層に連なっている。この黒色土層を2群に分けるとすれば、図6のようにその上層を灰黒色土層とし、その下層を黒色土層とすることができよう。

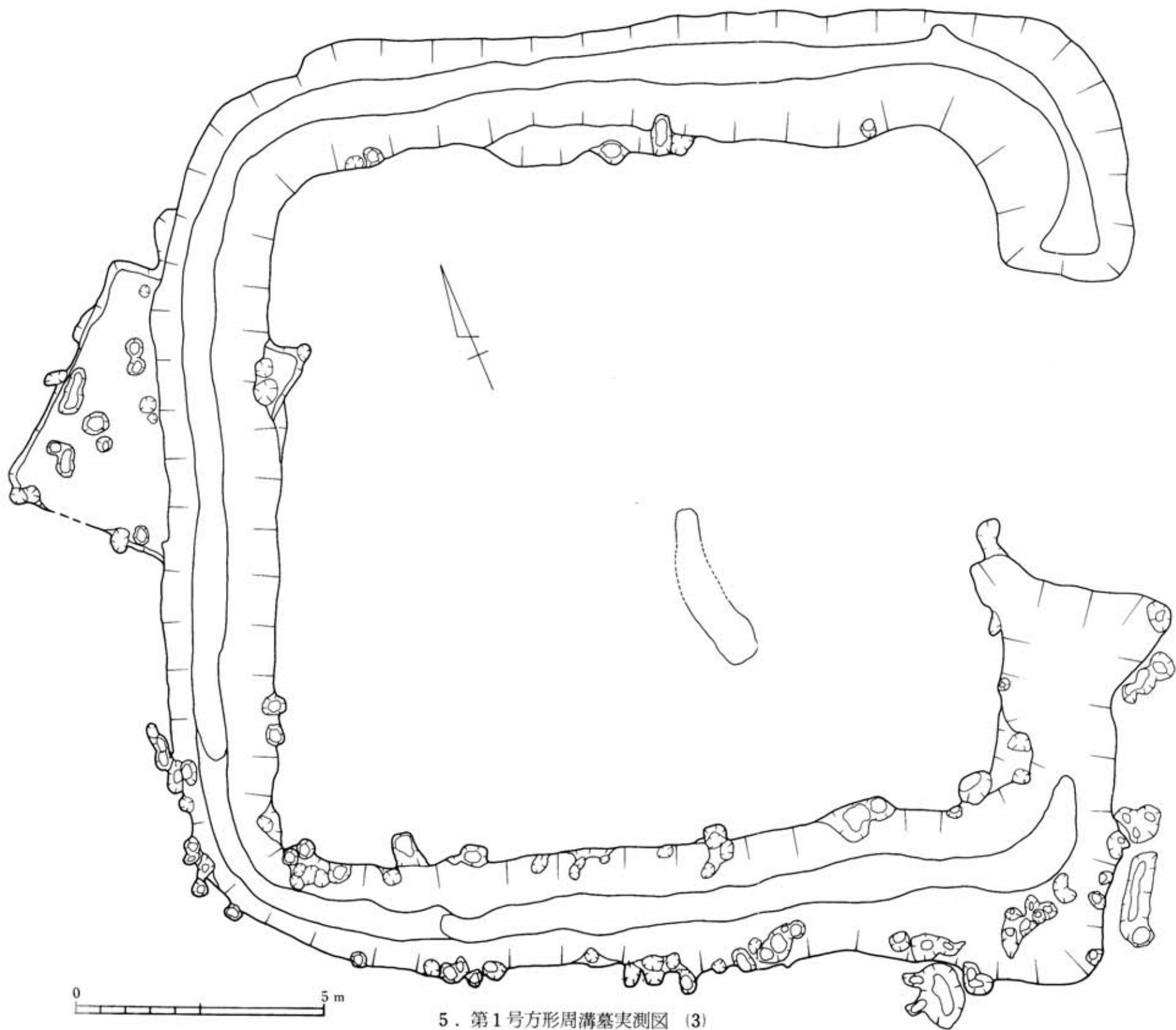
この溝内における堆積物の在り方において注目される第1点は、下層の黒褐色土層は方形台状部のローム層の上につづく黒褐色土層とほぼ同一層であると推察されることであろう。第2点は、黒色土系土層は、現在の表土とも封土を形成する土層



3. 第1号方形周溝墓实测图 (1)



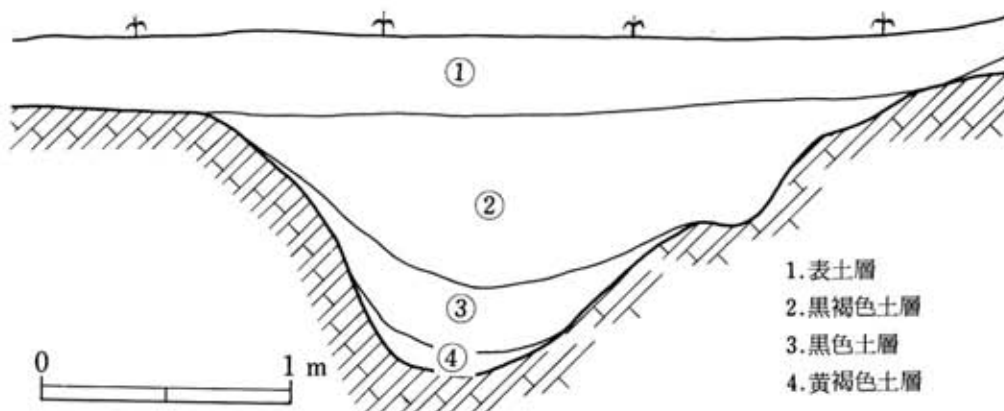
4. 第1号方形周沟墓实测图 (2)



5. 第1号方形周沟墓实测图 (3)

とも異なる有機質土層であることである。

6. 第1号方形周溝墓北溝断面図



(2) 内部構造

内部主体は、長軸をほぼ南北にとりながらもその両端が東へ「へ」の字形に弯曲している土塚墓である（図7）。この土塚墓の北端から台状部北端まで7.75mを測り、西端まで8mであって、方形台状部の東南部に寄った位置に設けられている。南主体部の中央部は約110mの幅で斜めに攪乱されていて、その全貌を知ることは出来ないが、その概要は次のとおりである。

主体部の全長3.3m、北方の上面幅50cmを測り、南方部上面幅80cmであって、横断面はともにU字形を呈し深さが塊石上面まで20cm、底面までが30cmである。北方の主体部底には塊石を敷きつめているが、南方部にはそれがみられない。この塊石敷きがどこまで南方に延びていたかは不明である。

(3) 出土遺物

方形周溝墓の内部主体である土塚墓からは何ら遺物は検出されなかった。

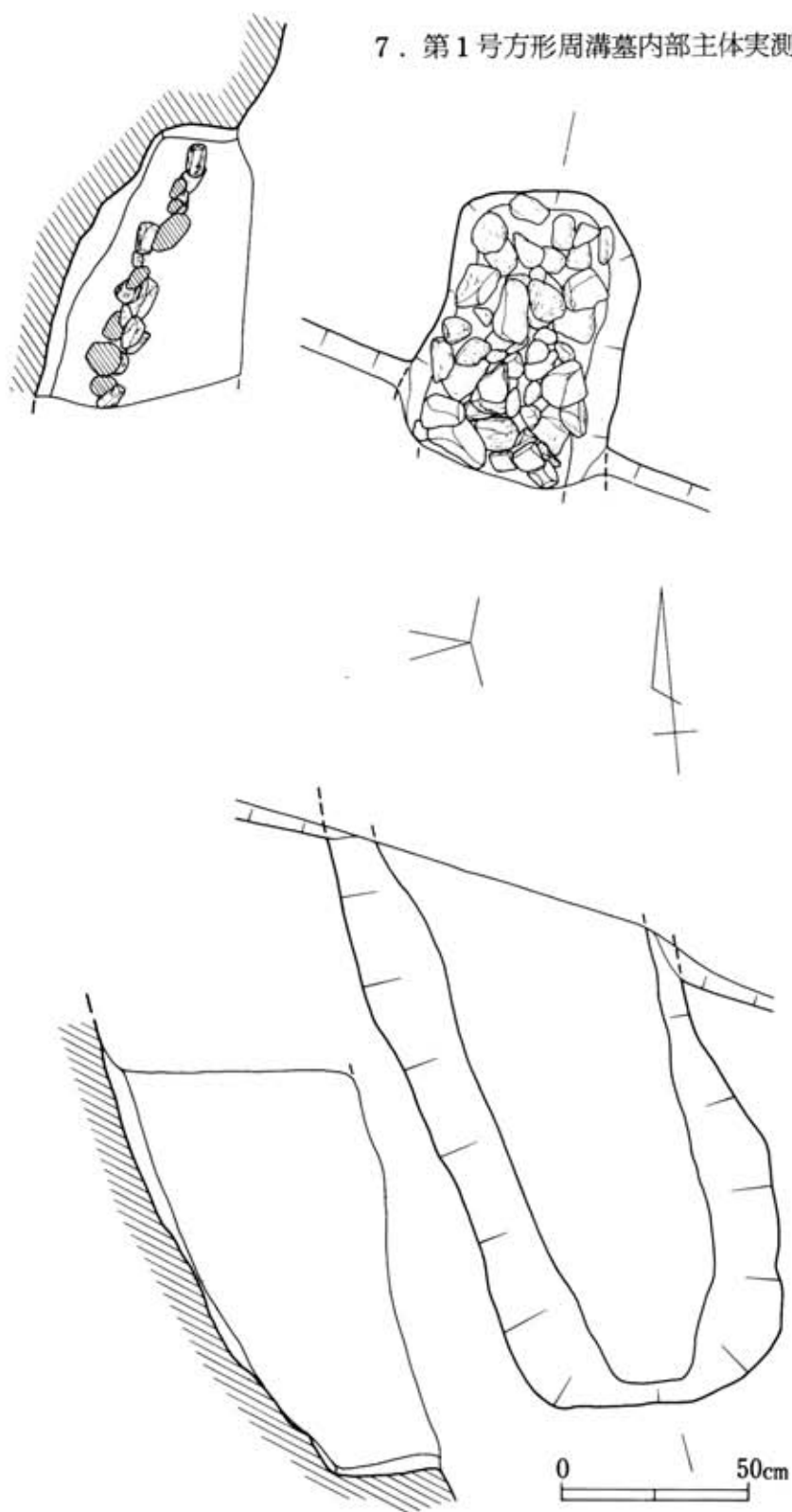
周溝内における出土遺物には土器がある。南溝から東溝にカーブする地点のほぼ底面中央部に一連の土器群がある。

ほぼ完形の甕形土器（図8の1）が、倒置の状態におかれ、その西隣に二重口縁を有する口辺部（図8の2）と、別個体の壺形土器が破壊された状態で、更にその西隣に壺形土器片と推察される一群がある。

甕形土器は、口径16.7cm、高さ23.9cmである。口縁部は外方に向かって開き、底部は丸底である。灰褐色を呈し刷毛による調整のあとが認められる。

壺形土器は、口辺部と頸部があり、胴部以下を欠損しており、また頸部下端は丹念に打ち欠いた痕跡をとどめている。口縁径25.6で口辺部の中間に鋭い稜を置いて大き

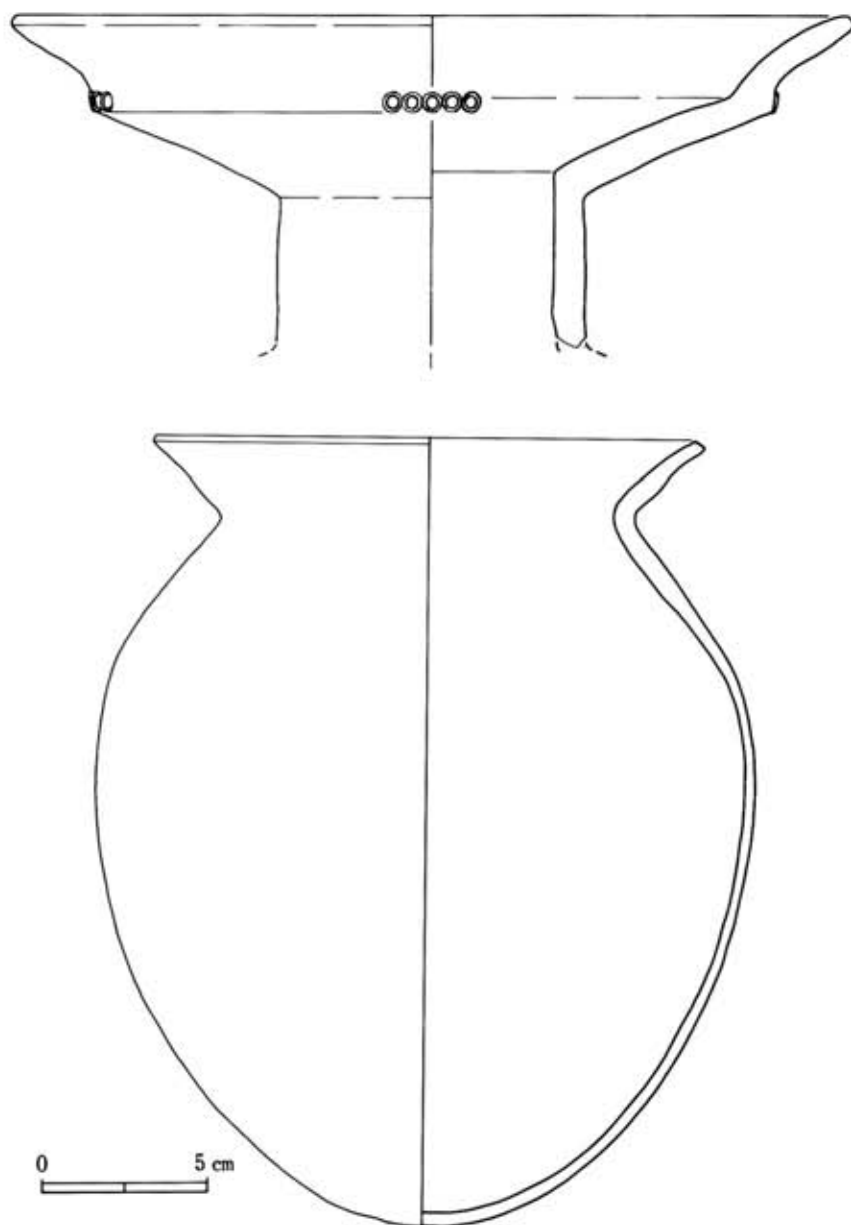
7. 第1号方形周溝墓内部主体实测图



く外反する。頸部は直径 9.4cm, 高さ 4.4cmの筒形を呈する。胴部は欠損しているが重心のさがった玉ねぎ状の土器であろうと推定される。

口縁部の内側には篋による数条からなる波状紋が口縁に沿って描かれている。また、口辺部外の稜線にそって3ヶ所に5連輪からなる竹管紋があり、稜線のすぐ上部に数条からなる波状紋がめぐらされている。器体の表裏面とともに篋による調整がなされている。

8. 第1号方形周溝墓出土遺物実測図



3. 第2号方形周溝墓

(1) 外部構造

(ア) 封土

第1号方形周溝墓の南東部の調査時において溝が確認されたことによって、この調査が進められることになった。

この時点では封土の存在は認められず、東南の方向へ向かって徐々に下降している、この周溝の内部主体についてはその有無を確認することができなかった。しかし、第1号方形周溝墓の構造からみて、この周溝墓には規模は不明であるが本来的



には封土が存在していて、その封土の部分に内部主体が営まれていたのではないかと考えられる。

(イ) 周溝

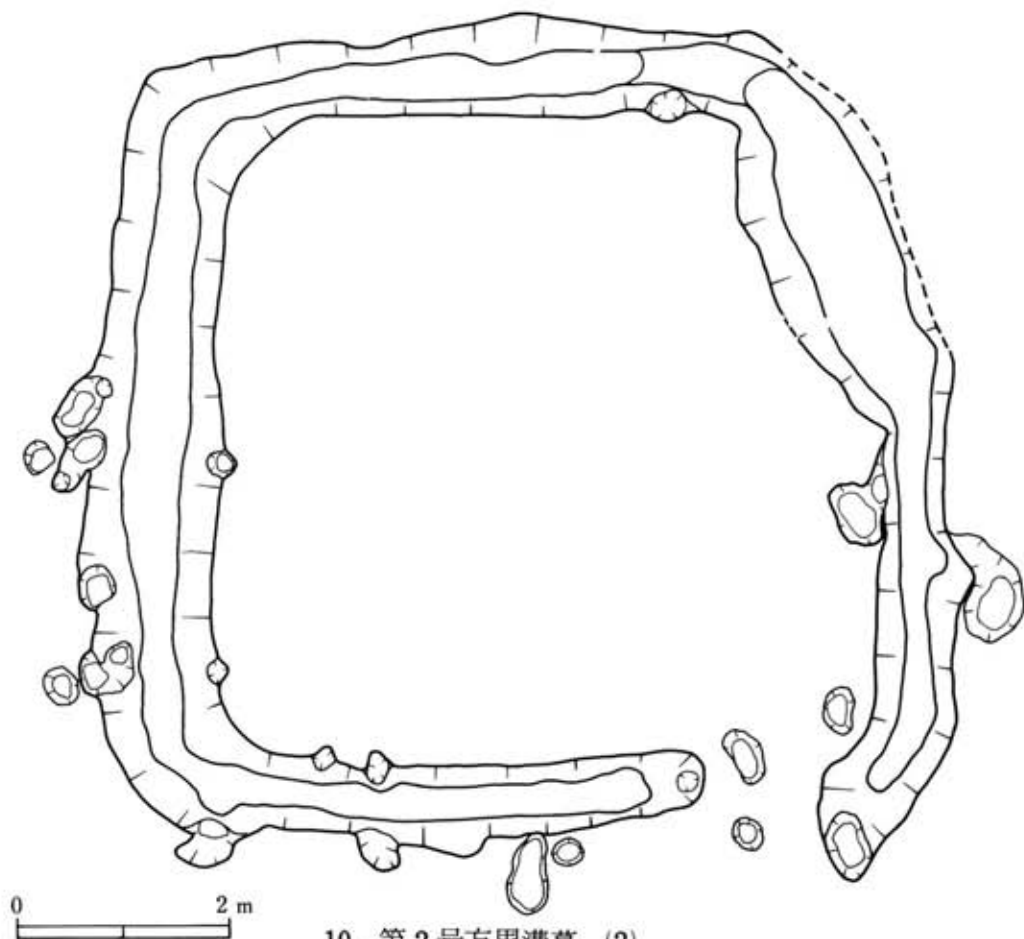
第1号方形周溝墓の南東部に接して第2号方形周溝墓の北西隅の溝が隣接し、ほぼ平行して周溝が穿たれている。

この周溝墓は、台状部の東西7.75m、南北8mを測るが、南東のカーブ面に平面的な乱れがある。また、西南部のカーブ南面で溝が消滅して陸橋部を形成している(図10)。

周溝は上面で約幅1mであり、その断面は、台状部側がやや急な傾斜をもつ最深部75cmのU字溝である。溝内の堆積土は下層の黄褐色土層が約8cm、中層が9cm、上層が約55cmでその上に表土層がある。

(2) 出土遺物

この周溝墓から遺物を検出することはできなかった。



10. 第2号方周溝墓 (2)

4. 住居址

第1周溝墓の西辺溝の上面に住居址が発見された。この第1号住居址は縦5.25m・横4.5mで深さ約25cmの竪穴式住居址である。周溝の西部に住居の2隅をおき、方形台状部に1隅をおいている(図5)。この住居址から出土した土器は壺形土器(図14の2)と推定される口縁部の破片である。口辺部は頸部から鋭く立ちながら外反し、頸部から胴へはなだらかな曲線を描いている。口辺外部は縦目に、胴部は斜に刷目調整が施され、頸部に断続的な押圧線がある。口辺部内部には口縁に沿って幅1cmの刷目痕がめぐりその下部は斜位の刷毛目、胴内部に刷目による調整がみられる。若干の砂粒を含むが焼成は良好で黄褐色を呈し、一部に煤の付着がみられる。

また、この住居址の東北方6mの地点にも第2号住居址と推定されるものが存在するがその規模を明らかにすることはできなかった。

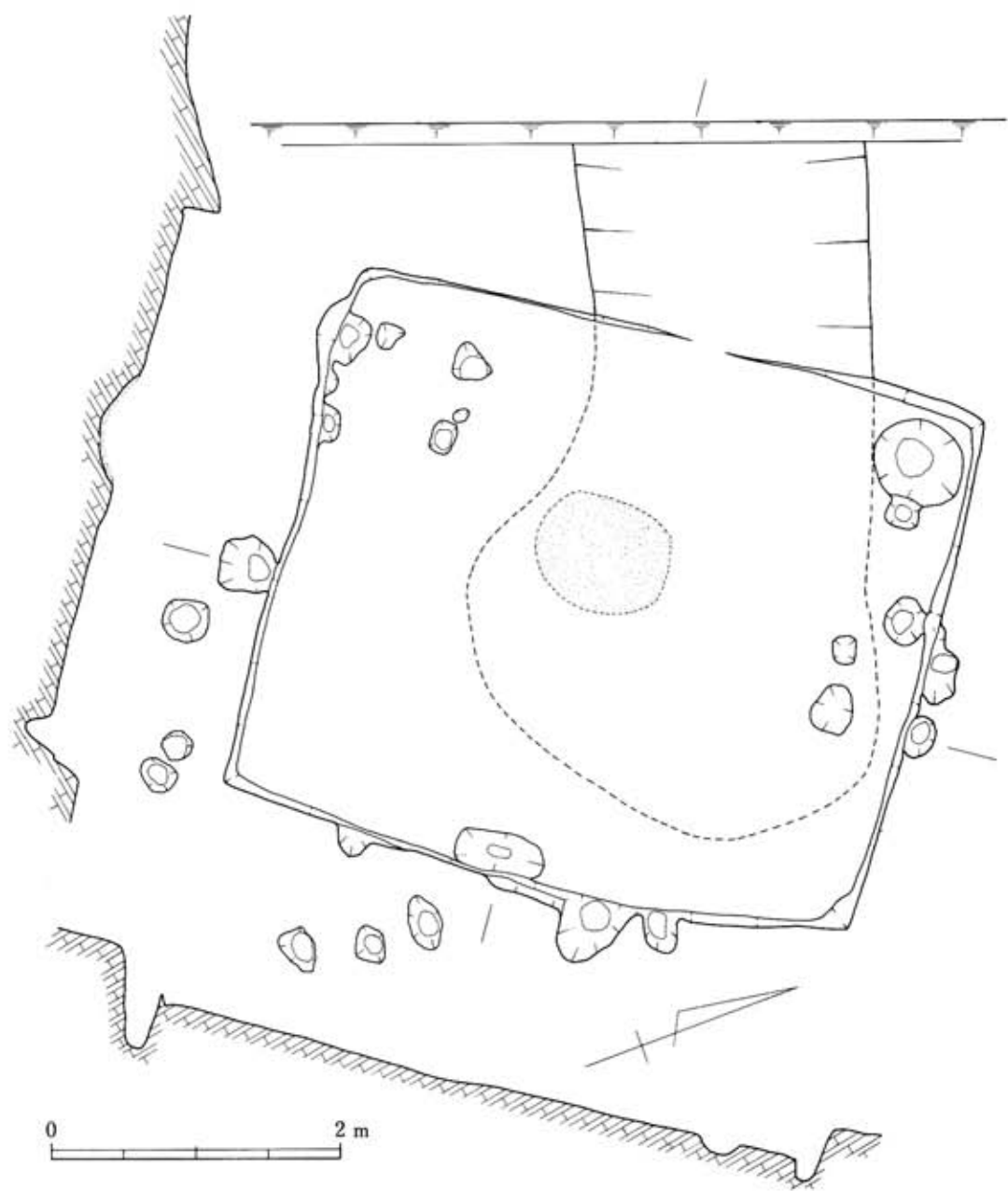
第3号住居址は、1号住居址の南西10mに位置し、縦4.5m・横3.8m・深さ30cmの竪穴住居址である。中央部よりやゝ西隅に寄ったところに径80cmの円形を呈する炉址が存在する。また、床面には壁面に添って幅5cm・深さ3cm程度の溝がめぐらされている(図11)。

第4号住居址は、3号住居址の南に隣接し、西および北壁が切断されているが、縦5.1m・横4.7mの長方形を呈し、北壁の最高壁面35cm・南側の最高壁面で20cmを測る。小破した土器片と砥石片1を検出した。(図12)

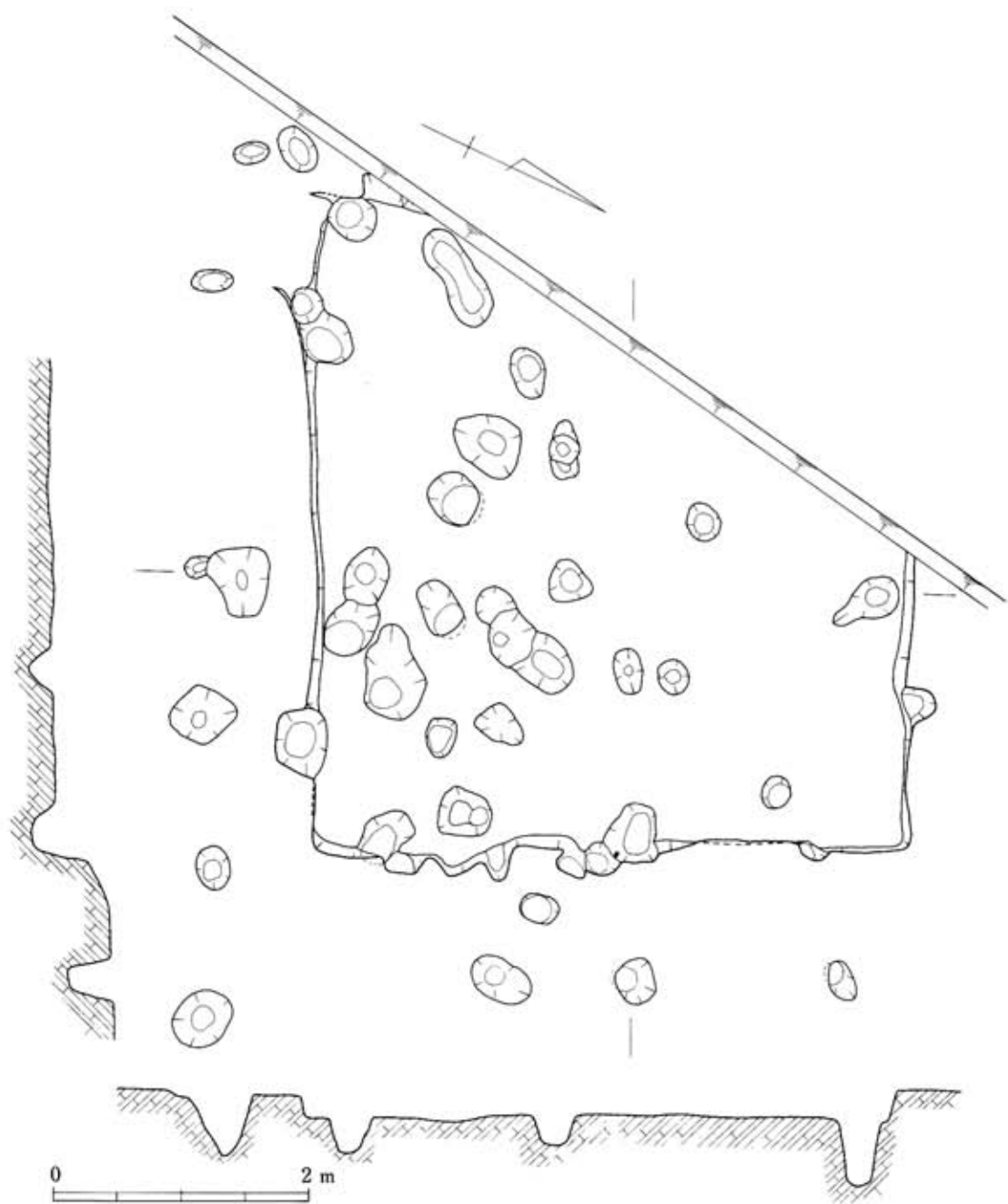
第5号住居址は、第4号住居址の東側、第1方形周溝墓の南斜面に位置する。縦5.3m・横4.0mの長方形を呈し、北壁で35cm・南壁で25cmの高さをもつ竪穴住居址である(図13)。小破した土器片に混って、胴部以下を欠損した土器が倒置状態で存在する。

この土器は、壺形土器であって(図14)、口辺部は「く」字状を描き、張り出た球形の胴部をもっている。口縁内外は刷毛による調整、肩から胴部にかけては、櫛状用具で斜方向に調整を繰り返したもので斜格子文を呈している。内部は篋で縦に粗しく調整している。砂粒を含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

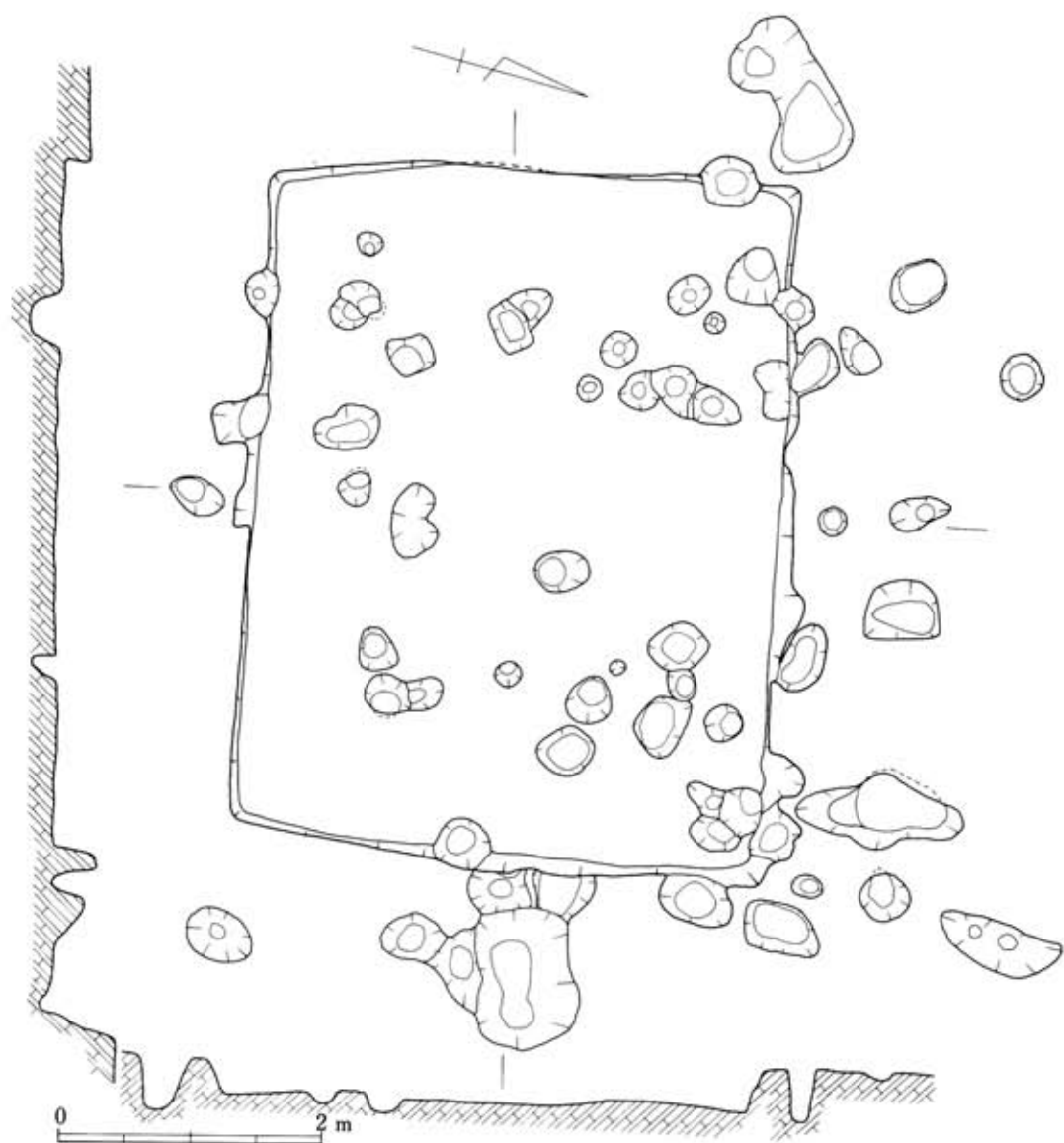
東部の調査区外からも3戸分の住居址が確認されているので、この丘陵上には少なくとも8戸以上の集落が形成されていたものと考えられ、これらの住居址は形態的にも類似し、また出土する土器も古式土師式土器のカテゴリーとして把握できるであろう。



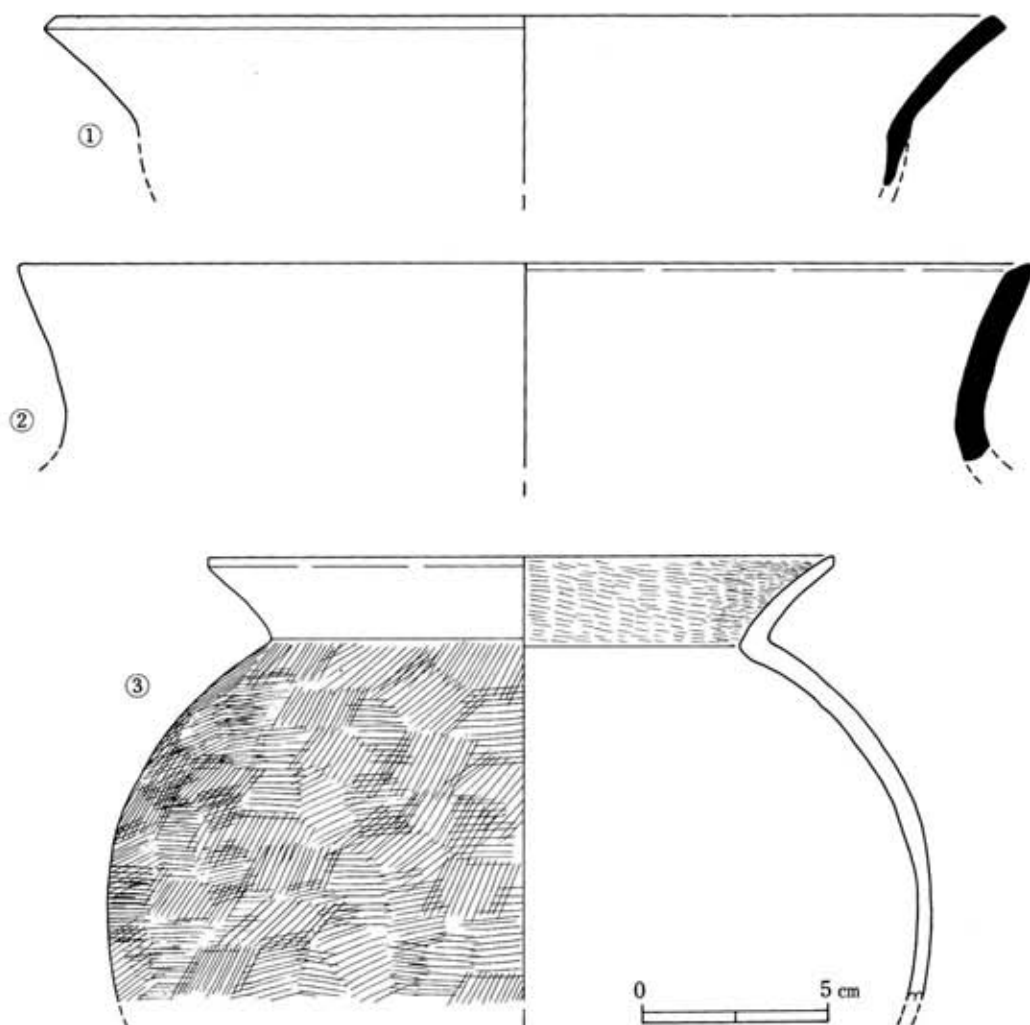
11. 第3号住居址实测图



12. 第4号住居址实测图



14. 住居址出土の土器実測図



①・② 第1号住居址出土 ③ 第5号住居址出土

5. その他の調査

(1) 溝状遺構

第3号住居址の上面から西壁に向って黒色土層の堆積が見られた。住居址上面では南北2.7mの袋状であり、最深部15cmの皿状を呈する断面をもっている。この黒色土層は、住居址の西壁を上面で2mを切り、ゆるやかなV字形の断面を呈し、その下端

また、D1とD2にみられる溝の起点および走る方向等に共通性がみられることを附記しておこう。

(2) 土壇

第1住居址と第2住居址との間に存在する長径7.5m・最大幅2.3mの不整形土壇(図15)や、第1方形周溝墓北部に長径1.5~2mの土壇が存在するが、その性格を明らかにすることはできなかった。

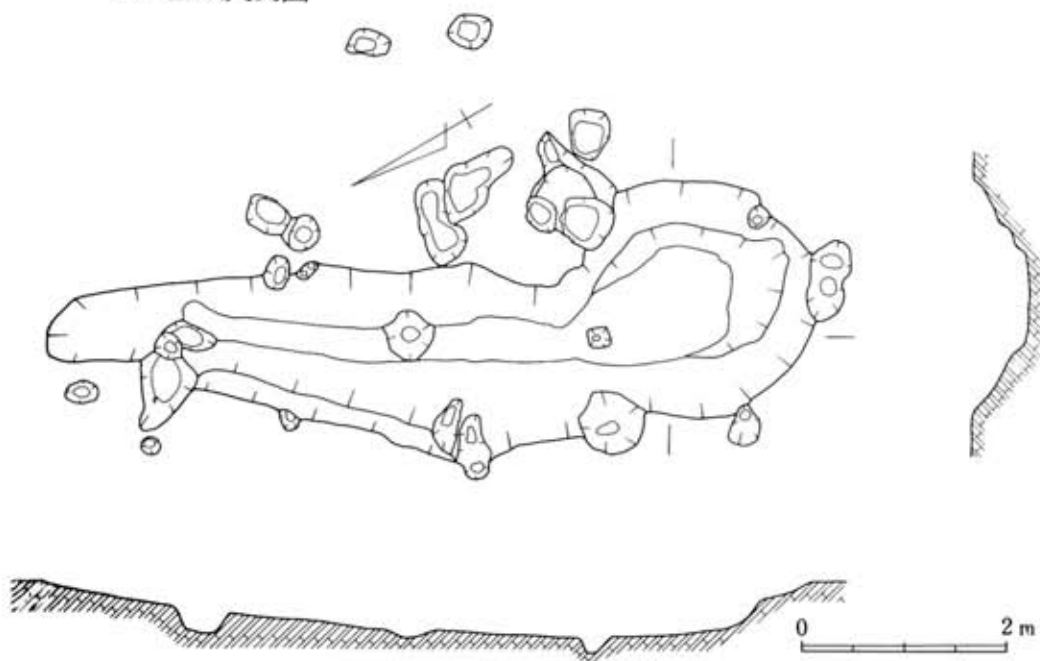
D2は第3号住居址の上面から西壁をV字形に切り、その底面は西床面をやゝ削り、深さを増しながら西へ延びるが、国道3号線で切断されているためにその全貌を明らかにすることはできない(図11)。

住居址の西壁から溝中央部で西へ1.45mにみる断面は、上面で2.8m、深さ0.7mのV字形を呈する溝である。底部から30cm上部までは黒褐色(粘質)土層が堆積し、その上段には黒色土層が堆積して、その上部は表土層となっている。

出土する遺物が検出されないので、時間の推定が難しいが、住居址を切っていることから住居が廃絶した後に形成された遺構である。

この遺構の北方13mの地点に、上面幅2.2m、深さ0.9mを測り、その断面がV字形を呈する溝状遺構がある(D3)。この溝も西へ延びるものと考えられる。この溝の床面はほぼ水平に近く、約30cmの黒褐色土層がV字形に堆積し、その上部に黒色土層が60cmみられ、その上に表土層がある。

15. 土壇実測図



Ⅳ 考 察

1. 土師式土器

本川原遺跡は、住居址と方形周溝墓からなる複合遺跡である。これらの遺構から出土する土器は古式土師式土器として把握できよう。

しかし、筑後川を中心として展開する筑後・佐賀平野における弥生末期から古式土師器にいたる編年的研究は未だ、完成されていない現状である。佐賀平野においては、佐賀市立成章中学校庭遺跡出土の土師器が古式土師器として注目されていたが、近年この種の土師器を出土する遺跡として新たに小城町久蘇遺跡、牛津町柿樋瀬遺跡、中原町姫方原遺跡、同町粟崎遺跡、などが確認され、筑後においても城山遺跡の確認がなされつつある現状である。しかし、整理分類された遺跡は柿樋瀬遺跡のみであり、これも小範囲の発掘調査である。従って、佐賀平野における古式土師器の編年は、これらの遺跡の調査報告書を待った上で稿を新たにしたい。ただ、古式土師器の中にあって住居址から出土する土器が第1方形周溝墓から出土する土器よりもより古い時代の所産であると云えよう。

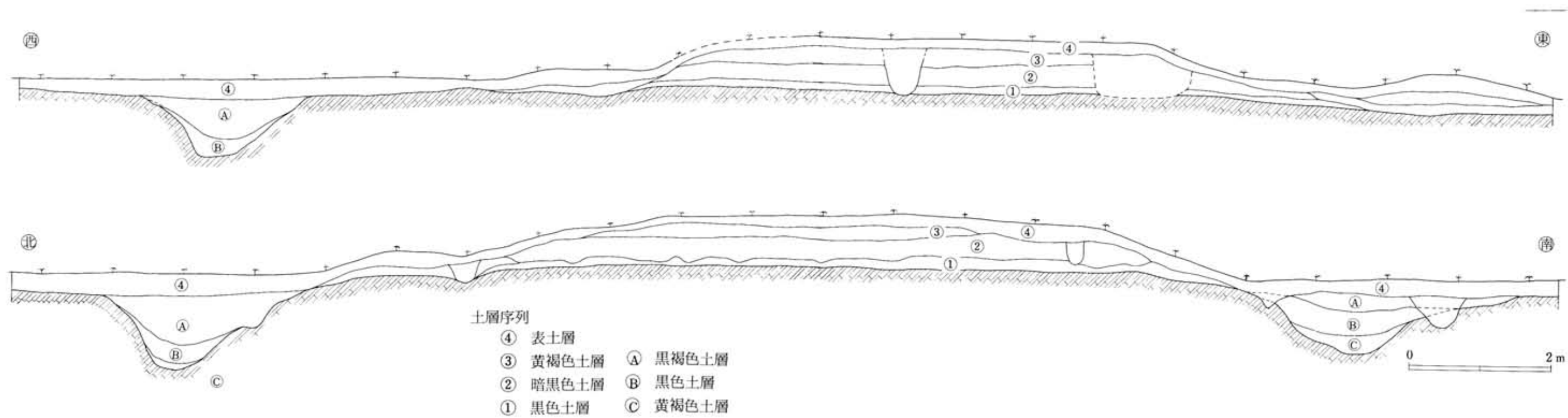
2. 方形周溝墓墳丘構築論

方形周溝墓に封土が伴う遺跡例は極く限られたものと云われる。従って、封土を有する第1号方形周溝墓の意義は大きいと思われる。そこで、封土の形状・高さについて調査結果に基づいて若干考察してみたい。

図7のとおり基盤層であるローム層の上部に約10cmの黒色土層（第1層）がのっている。この土層はこの墳丘を構築する際の表土層であると考えられ、その上部に約40cmの黒色土層（第2層）が上積みされている。この土層は周溝墓の周辺部に堆積した方形周溝墓の構築当時における表土層であろうと推定される。この層の上にローム層を掘り返したときの黄褐色土層（第3層）が30cmのっている、その上に更に現在の表土層（第4層）がある。

この表土層とその下部のローム層（第3層）の厚さについては最も慎重に検討を加えねばならぬことであって、第3層であるローム層の堆積の厚さや量が重要な課題であろう。現在における量よりも、この墳墓の築造時における土量が問題である。即ち、積み上げられたローム層（第3層）の下面がポイントになるであろう。つまり、このローム層の堆積土は、周溝の掘削によって掘出された土層と推察され、周溝から搬出されたローム層の土量は約 72.1m^3 であるとされる。従って、第2黒土層の上に積まれているローム層の量は約 72.1m^3 であることになるであろう。

16. 第1号方形周溝墓封土断面图



現状の方形台状部の封土の在り方は、基部では方形、墳頂部でも原則的に方形を呈しているのである。従って、原形は角丸の四角錐形というよりも、平面的に角丸の方形であり、その断面は角のとれた台形半球に似た弧を描く封土ではなかったかと推定されるが、台形中央部における積み上げられた高さについては明らかでない。

そこで周溝中から掘り出された土量にもとづき、計算された高さは $115 \pm 15\text{cm}$ であろうと推定される。この積み上げられた第3層の高さに、第2層の厚さ約 40cm を加えた高さ、つまり、 $155 \pm 15\text{cm}$ が実質的な封土の高さになるのではなかろうか。

また、周溝外の地表面からの封土の比高は約 $175 \pm 15\text{cm}$ となり、更に、最も深い周溝底からは約 320cm 程度と計算されるのであって、相当に高い封土をもつ方形周溝墓と云えるのではなかろうか。

注1 大塚初重「方形周溝墓の研究」駿台史学第 号

注2 土量計算は佐賀県立小城高等学校教諭横田宏氏に依頼し、実測図によって精算していただいた。

注3 大塚初重氏は注1の研究で「封土は 100cm 程度が一般的」といい、茂木雅博氏は「須和間遺跡」で 120cm と推定している。

3. 本川原遺跡の歴史的位₃置

本川原遺跡周辺では、弥生時代中期において、一つの文化圏を形成していた₁と考えられるのであるが、古墳時代に入って剣塚等が形成され、時期を同じくする基山町伊勢山遺跡・鳥栖市永吉遺跡などの住居跡が出現するまでの約 200 年間は空白の時代である。その空白の時代を埋める一つの遺跡として本川原遺跡が、住居址と方形同溝墓を伴って出現したことはその研究史上意義深い事といえるのではなかろうか。

方形周溝墓は、所謂高塚古墳が出現する以前に形成された古墳時代の墳墓であるといわれる₂。この方形周溝墓の祖形は、弥生時代中期にさかのぼることが予測され、小城町晴田小学校庭遺跡₃にみられる甕棺墓を内部主体とする弧状溝墓などがそれと推察されるであろう。

方形周溝墓は、溝を以って墓域を設立し、低いながらも封丘をもつ埋葬施設であって、或る特定の人物——部落国家における支配者階級の墳墓といえるであろう。弥生時代後期には汎日本的に分布し、古墳時代前期末を以って消滅するのが方形周溝墓であるとされている。その内部主体が甕棺であり、木棺・石棺・土壇・石蓋土壇墓などであって、弥生時代における墓制の発展的様相を有していることは疑うことができないと考えられる。

鳥栖周辺における弥生時代終末期から古墳時代前期にわたる空白の部分₃を埋める遺跡

として、この方形周溝墓の学術的価値は高く評価すべきものであろう。

しかしながら、この方形周溝墓の後は、畿内的な——大和朝廷的な前方後円墳の時代として鳥栖地方は新しい古墳文化を開花させるのである。本川原方形周溝墓を始めとする肥前・筑後地方の一連の方形周溝墓は、大和勢力が伸張してくる以前におけるこの地方の注目すべき所産として把握できるのではなかろうか。

注1 木下之治「原始時代」鳥栖市史

注2 樋口隆康「九州古墳墓の性格」史林38の3

後藤守一「古墳の発生」駿台史学2

小林行雄「古墳時代文化の成因について」日本民族

小林「行」古墳発生の歴史的意義」史林38—1

下津谷達男「古墳とその文化」歴史教育その他考古学講座など

注3 木下巧「弥生時代」小城町史

〈付〉 方形周溝周辺の穴について

方形周溝および住居址の周辺をはじめとして、この遺跡からは多数の穴が発見された。遺跡から発見される穴には、人工的穴と自然的穴とが存在していることはいうまでもないことである。

1. 人工的な穴

人工的な穴については、2種類のもが存在する。一つは打込み柱の穴、他の一つは埋込み柱の穴である。神籠石の柱穴や礎石または礎板などを伴う住居址の柱穴などは、後者であって、地面をV字状またはU字状に掘り下げ、その穴に柱を立てて周囲から土砂を埋め戻して柱を固定している。

人工的な柱穴の残存状態は、その立地する土地の土質に影響される点が大きく、特に基盤層を覆う覆土の質に影響される点が著しい。柱穴の中では、比較的にかさい材が用いられる打込み柱の穴の保存が悪く、埋込み柱は一般に大きな材が用いられる関係から残存している率が高い。

住居址などの柱穴が残存するためには、遺跡が低湿地に立地するか、高燥地においては地表の覆土が基盤層と異質のものであって、その色彩が異なっているなどの条件が必要であろうと考えられる。帯隈山神籠石の内廓から発見された数戸分の古墳時代住居址においては、柱穴を発見することができなかった。基山町伊勢山遺跡から発見された8

戸分の住居址には、無数の穴があったが、柱穴と確認できるものは4戸分の竪穴式住居址に伴う一部のものにすぎなかった。また、中原町姫方原遺跡の住居址に伴う柱穴も、確実なものは極めて少なかった。

人工的な柱穴は、一定の規準をもって配置されていることはいうまでもないが、自然的な木根穴との識別が困難であり、また、消滅してしまっていて残存していないと推定される柱穴も相当にあることが考えられる。

2. 自然的な穴

自然的な穴は、その大半が木根穴であって、森林地帯の住居址の調査に際しては、この木根穴と柱穴との識別が困難である場合が多い。森林地帯においては、長年月にわたって樹木が生え、そして枯れるという樹木の生枯を繰り返していることが考えられる。しかるに、そのような自然の長い営みの歴史に比して、木根穴が意外に少ない点が目立つ。また、木根穴で地下1メートル以上の深さまで、その痕跡をとどめているのは極めて少なく、枯死して間もない木根穴に限られていて、大部分の木根穴は地表下30～60センチのところまでとどまり、それ以上はのびていない点も注目される。この木根穴が一定の深さまでしか残存していないところに、柱穴との混同を生じやすいという性格を有していることを否定することができない。

このような木根穴の在り方から考えられることは、木根穴は一定の期間を経過すると、周囲の土砂の圧力を受けて消滅し、その痕跡をとどめるものは極めて少なくはないかということである。このことは、木根穴に限らず柱穴にも該当することであって、木根穴や柱穴が長く残存するためには、地盤と異質の表土層が雨水とともに空隙を生じた穴の部分に注入して穴の部分を充填することが必要である。そのために、木根穴の場合は、表土層の土砂が木根穴の先端まで注入する以前に、周囲の土砂の圧力をうけて空隙の部分はふさがってしまうため、木根穴でその痕跡を深い部分まで残しているのはほとんど稀である。

3. 本川原遺跡の穴

人工的なもの自然的なものに関係なく、古墳時代までさかのぼる穴は、地質的な好条件に恵まれない限り、残存するものは極めて稀である。しかるに、本川原遺跡からは実に多数の穴が発見された。これは、褐色のローム基盤層の上に、火山灰質の黒色表土層が堆積しているという地質的条件の結果であると考えられる。この基盤層の上を覆う黒色土層が堆積した地質学的年代についての考察が必要であるが、ここではこれには触れないで、穴そのものについて検討を加えてみたい。

周溝の周辺に多くの穴があり、一部の穴は周溝の壁面にも存在している。このことから周溝内の堆積土層中にも当然穴が存在していたことが推定される。この周溝の壁面に

残存する穴の中には、その穴の深さが数センチに過ぎない浅いものもあって、これを柱穴と仮定すれば、柱としての機能を有するとは考えられない。要するに周溝中に土砂が堆積した後の穴であることは確実であって、この方形周溝と関係のある穴ではないと考えられる。

住居地の内部または周囲からも多数の穴が発見されているが、住居地の柱穴は一般に一つの規準を有しているのに対し、この遺跡発見の穴は全く不規則であって、多数の穴の中から住居地に伴う柱穴を明らかにすることはできなかった。

この遺跡には雑木が生育しており、また、戦時中には一時開墾されて南瓜などが栽培されたといわれている。その土地利用の変遷を物語るように、基盤層の直上からも磁器片が出土していて、この遺跡は相当の深さのところまで攪乱されていることを知ることができる。

このような遺跡の土地利用の変遷を考えると、この多数の穴の中には、木根穴や栽培のための支柱穴なども存在することが当然推定される。しかし、支柱穴に近いものも一部に存在している点からみて、方形周溝・古墳時代の住居などが廃絶した後に、この地が再び利用されたことを暗示しているが、遺物の上からみて、その時期を明らかにすることはできない。

この遺跡に残存する多数の穴で、方形周溝と直接関連のあるものはなく、古墳時代の住居地に伴う柱穴についても明らかにすることができなかった。多数の穴は、木根穴であり、一部に土地利用の変遷に伴って設けられた仮設物の柱穴や支柱穴も残存しているのではないかと考えられる。

图

版



1. 第1号方形周溝墓の全景（南より望む）



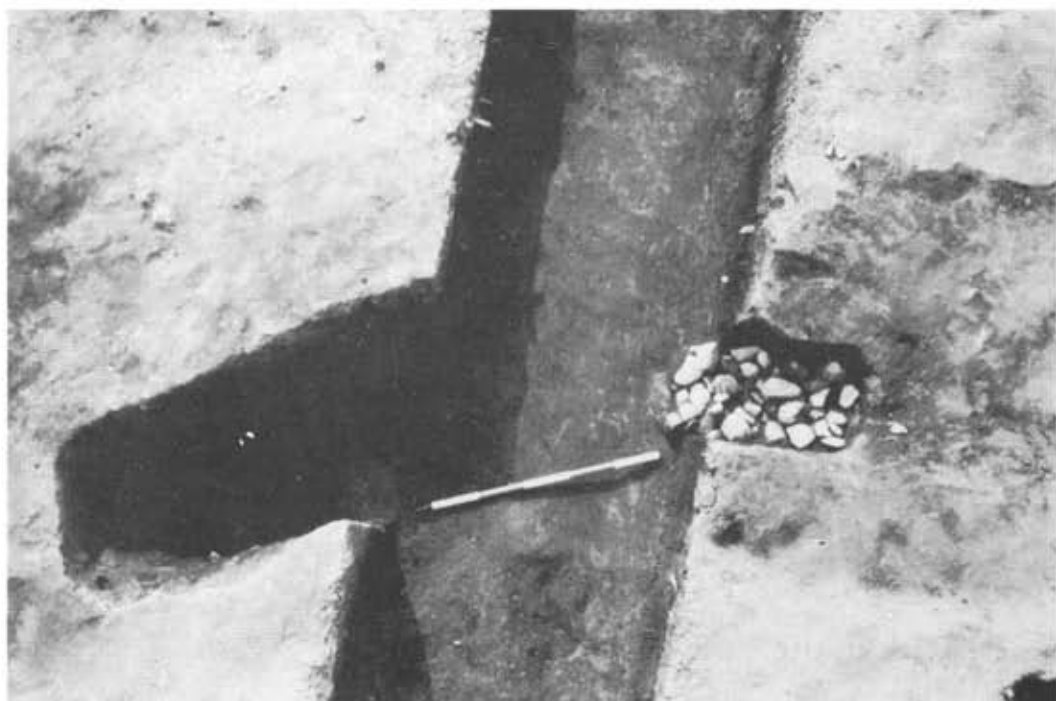
2. 第1号方形周溝墓の全景（北より望む）



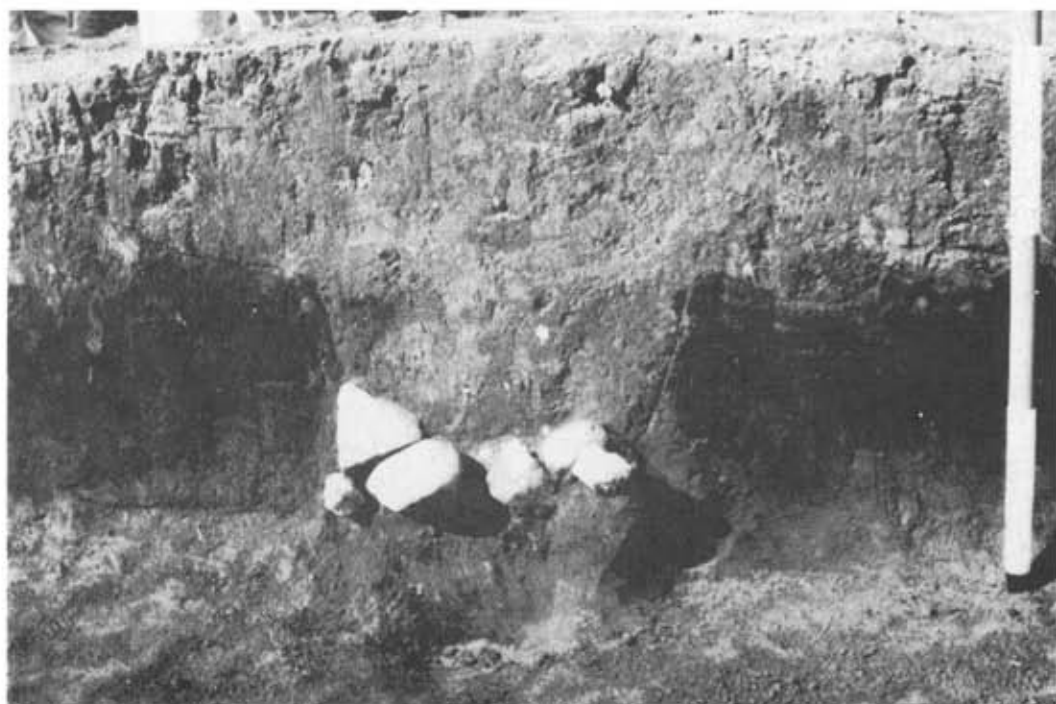
3. 第1号方形周溝墓の溝(1)(南溝)



4. 第1号方形周溝墓の溝(2)(南西の曲部)



5. 第1号方形周溝墓の内部主体



6. 第1号方形周溝墓の内部主体断面



7. 第1号方形周溝墓の封土断面（東西）



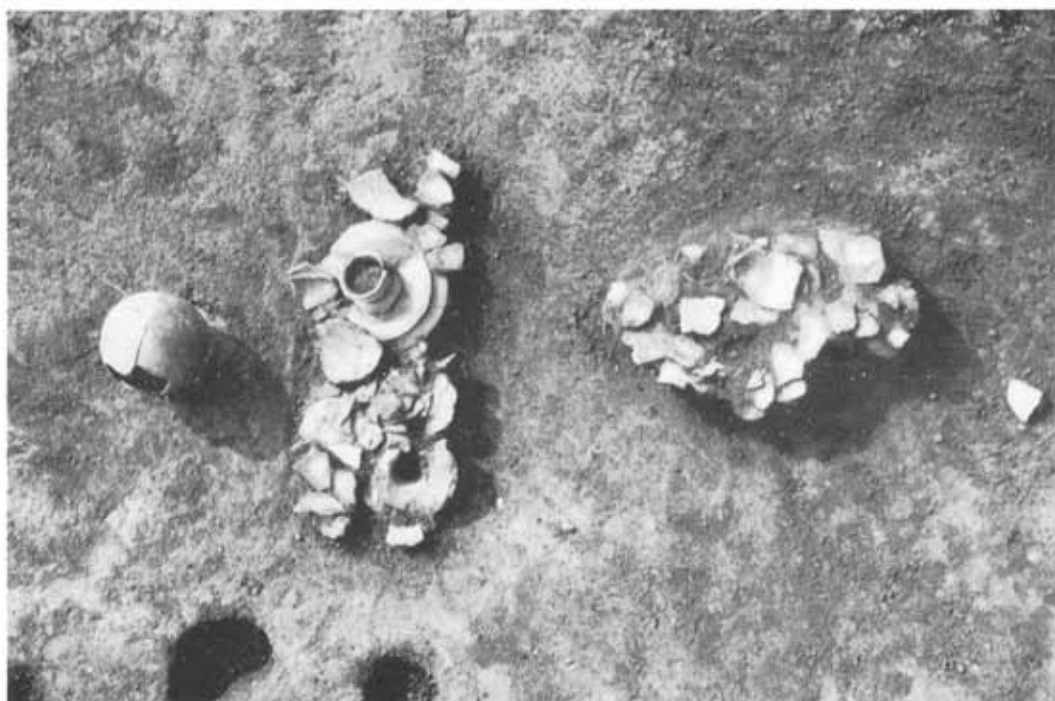
8. 第1号方形周溝墓の封土断面（南北）



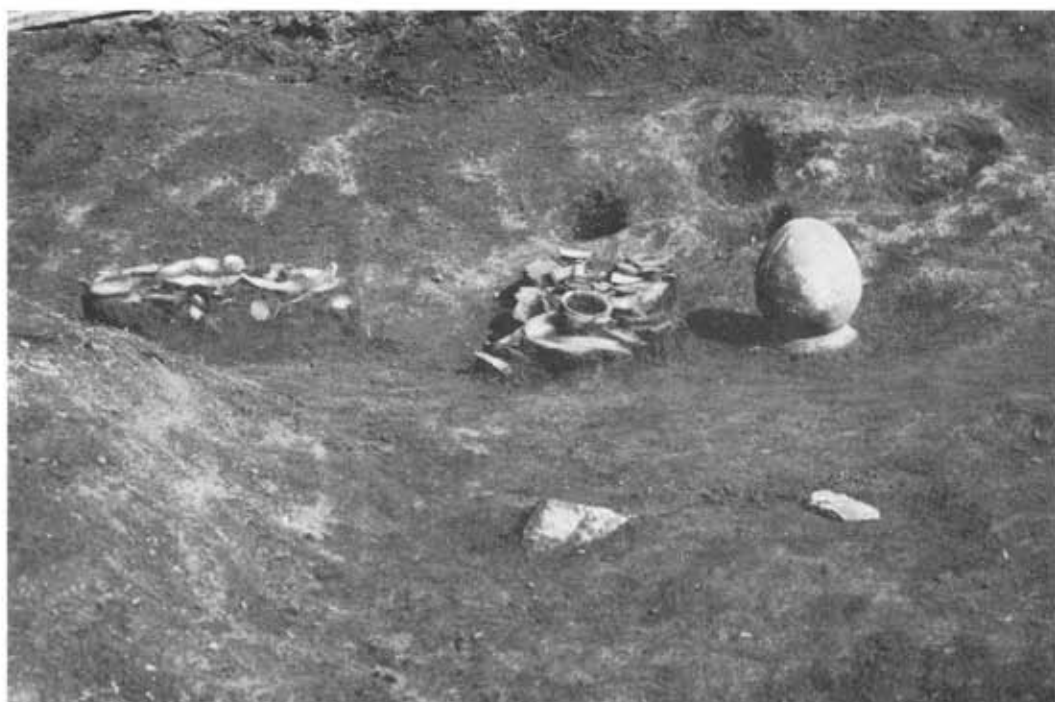
9. 第1号方形周溝墓の封土除去後の状況



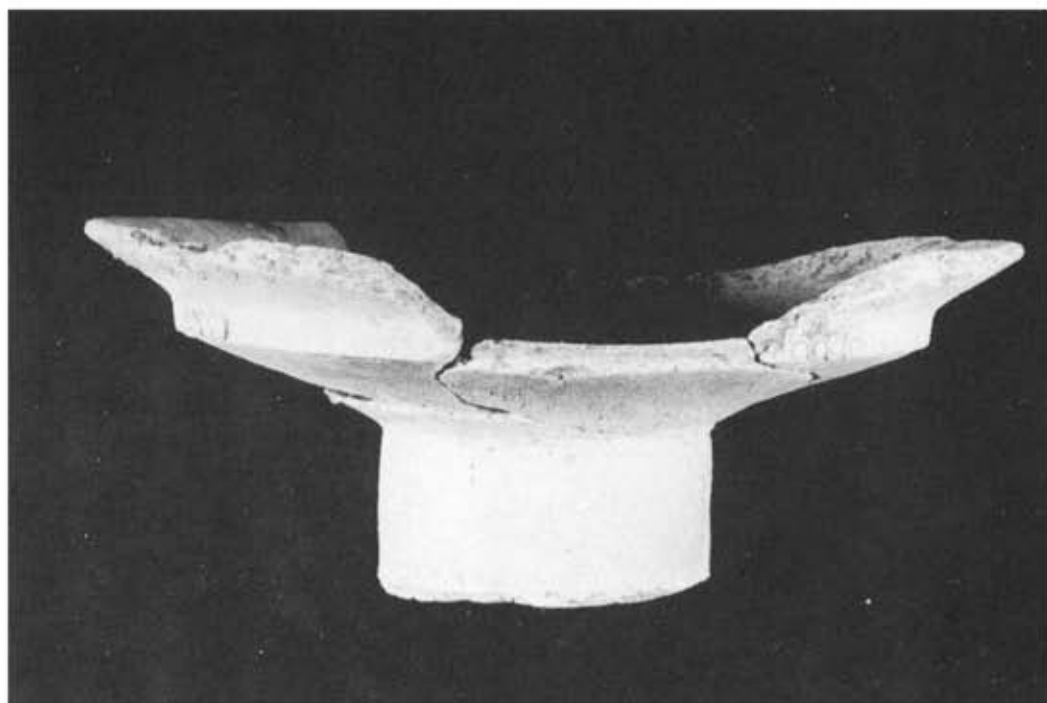
10. 第1号方形周溝墓の溝断面（南溝）



11. 土器の出土状況（第1号方形周溝墓）



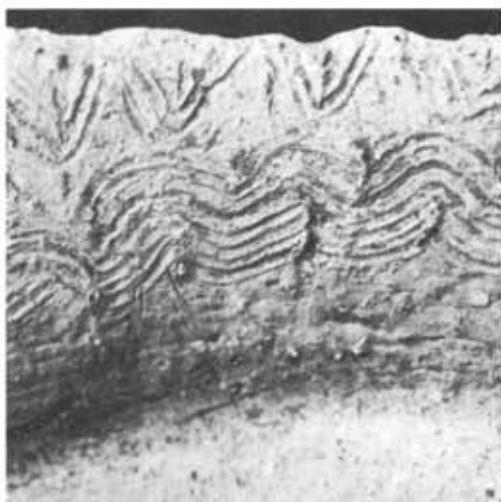
12. 土器の出土状況（第1号方形周溝墓）



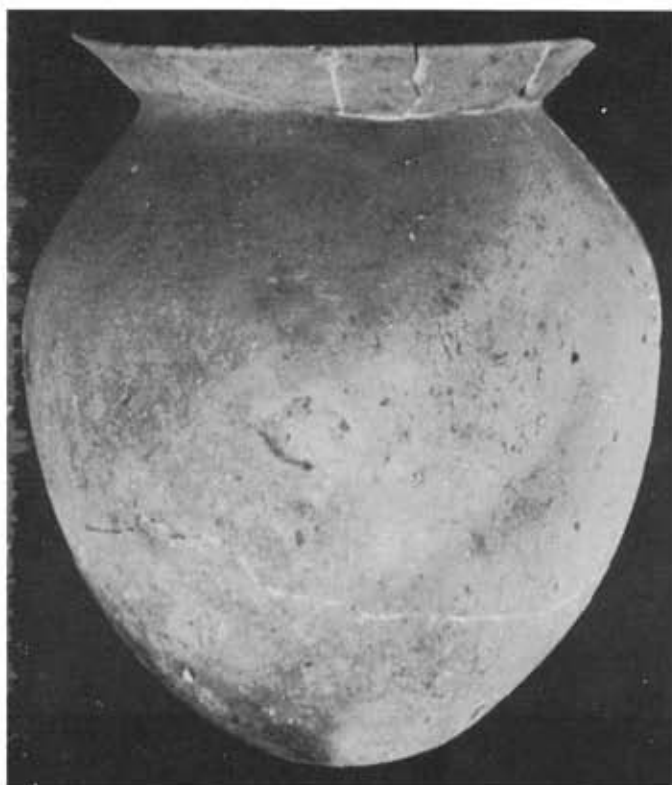
13. 壺形土器 (第1号方形周溝墓出土)



口辺外部の文様



口辺内部の文様



14. 甕形土器 (第1号方形周溝墓出土)



15. 第1・2号方形周溝墓の全景



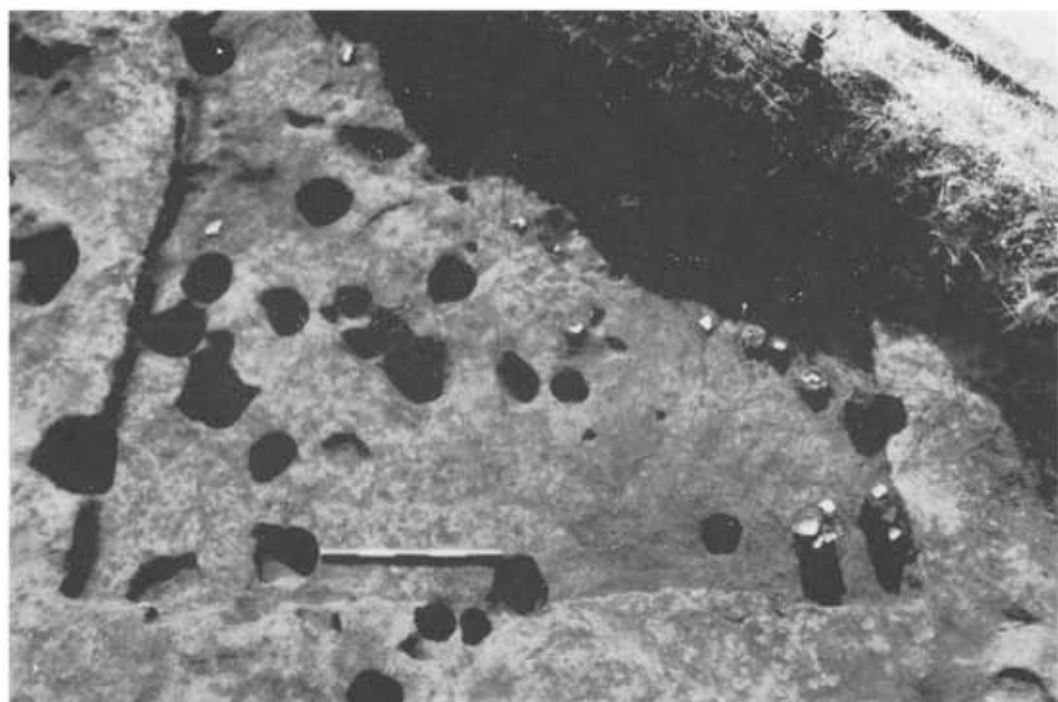
16. 第2号方形周溝墓の全景



17. 第2号方形周溝墓の溝



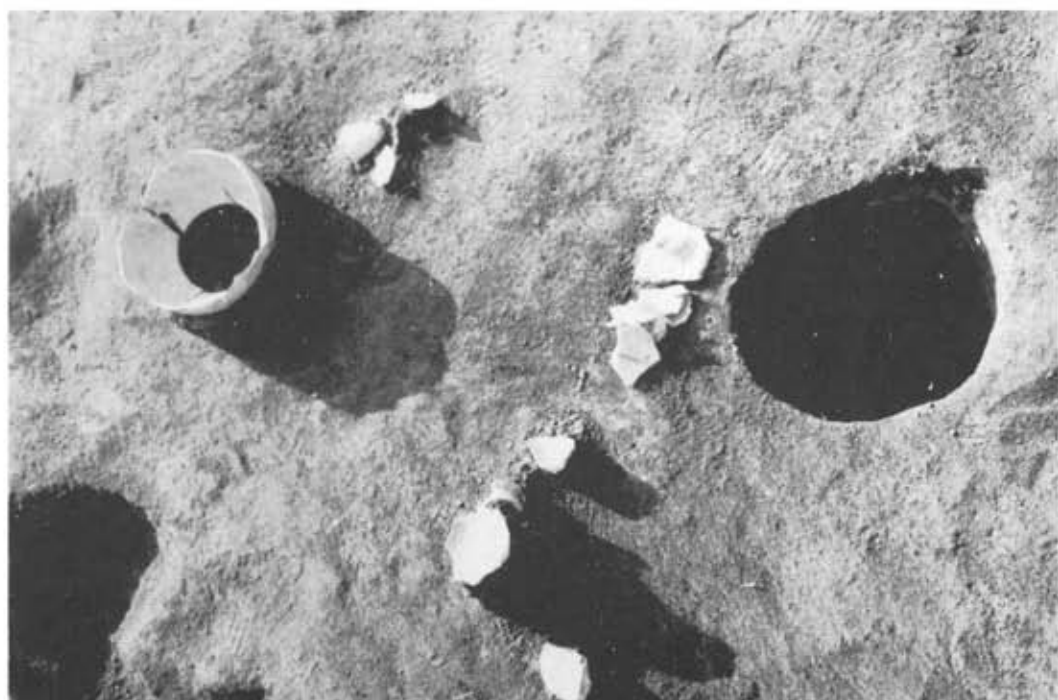
18. 第3号住居址



19. 第4号住居址



20. 第5号住居址



21. 土器の出土状況 (第5号址)

本報告書の分担はつぎのとおりである。

カ メ ラ 木 下 巧

実測・トレース 天本 洋一

執 筆

I・II・III・IV 木 下 巧

IV 付 木下 之治

佐賀県教育庁文化課

鳥栖市永吉町

本川原遺跡

佐賀県文化財調査報告書第26集

昭和49年3月20日印刷

昭和49年3月25日発行

編集 佐賀県教育委員会

発行 建設省佐賀国道工事事務所

印刷 合資会社 音成印刷所

